

氏名	許 尚 廉
ヨミガナ	キョ ショウ レン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第561号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 綴織技法による台湾民話の芸術表現の可能性 〈作品〉 永遠（とわ）の刻 随い、佇む（The way to dwelling） 滲み、馴染む（Color Fusion） 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	菅野 健一
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	上原 利丸
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

綴織（タペストリー）技法の研究に対して、人間の感情や自然の美しさに心から感動するたびに、「何」を織模様で表現することが可能なのか、身に付けた技法の幅はどれくらいできるのかを考えてきました。そのような疑問を自分なりの制作を通じ、少しでも理解していければよいと思います。また織の変化により、自身の思いを沿わせ、模様の美しい作品を創作したいと思います。民話調査をすすめ、書籍で見た銅版画、人類学者が撮った絵ハガキの写真資料も発見できました。それ以来、台湾原住民族の昔の生活風景を初めて認識し、大変に感動しました。作品制作はその書籍や絵ハガキから、雰囲気想像し、構成したものであります。山や植物などは、それぞれ自然の、あるいは素朴な美しさを代表する存在で、人間との関係を語るという物語を表現したいと思います。自身の中で様々な経験をしながら共感した事象を、綴織技法を使い、イメージと素材を考察することにより新しい作品のシリーズを展開しようと創作し始めました。

本論文の構成は次のようになっています。

第一章では、民族と民話の伝承について述べ、象徴と温もりという創作イメージの根源を説明します。「変形」、「作物伝説」、「精霊信仰」などの面から、民話の象徴と温もりを論じます。

第二章では、台湾原住民の生活に現れたシンボル化した工芸品、および工芸美術のなかで台湾の染織工芸の素材と特徴と台湾の綴織の可能性についてを考察します。

第三章では、綴織の歴史と特徴を述べてゆき、そして綴織を用いる理由を明らかにします。綴織技法を用いた民話の象徴と温もりを表現する作品制作の可能性を確定します。

第四章では、提出作品について述べます。作品のコンセプトとして、論じた象徴のイメージと温もりの基礎的な考察と結び付けることによって、提出作品を構成したイメージである物語を述べます。そして提出作品の制作過程を示します。

結論においては、以上の研究により、綴織技法を用いる意義について述べる。また自作と綴織の今後

の展開と合わせ、本論文をまとめます。

(論文審査結果の要旨)

台湾からの留学生である許尚廉氏の博士論文は、綴織による台湾民話の表現について論じた内容となっている。論述において、レヴィ・ストロースや柳田國男などの人類学や民俗学に関する重要な文献を読みこなし、同氏自身もまたフィールドワークを行うなど、研究調査にもとづいた学術論文を意図した点で評価できる。

本論文の構成は3章からなる。第1章では、台湾民話のもつ象徴性のほか、連帯感や優しさ、温もりなどについて論じられる。規定のルールから逸脱した世界観に心ゆさぶられることが作品テーマを選択する契機となったことが語られ、制作の動機を理解できる内容となっている。第2章では、台湾の染織と綴織について論じられているが、最も注目すべきは台湾の綴織の存在を指摘した点にある。ただ現存する作例が残されていないため限界もあり、台湾の綴織の伝統をいかに継承、発展させていくかについては、今少し詳述が望まれる。あわせて入墨と台湾染織の関連についても興味深い指摘となっている。第3章では、過去の自作と博士提出作品について、コンセプト、技法などがまんべんなく論じられている。博士提出作品の内容や展示プランについては、時間不足も伴い、さらなる詳述が求められるものの、過去の作品から博士提出作品に至るプロセスについてたどることができる記述となっている。

論文指導において、第3章の博士提出作品に込められた心の内面や感情、意識を引き出したかったが、作品制作の遅れに伴い、論述には至らなかった部分が残されたままとなった。ただ最近の傾向として、人文学や社会学の研究者から現代美術や工芸が熱い注目を集めていることもあり、同氏の関心事でもある研究調査を進めていくことにより、新しい展開が待っているものと期待される。以上のように論文が作品の背景を十分に説明し、同氏独自の調査成果を含む内容であることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

綴織と呼ばれる技法は平織りの変化技法で、古代から現代に至るまで世界各地にこの技法による数々の織物作品が残されている。古代エジプトのコプト織、プレインカの綴織、中世ヨーロッパのタペストリー、日本の綴織による帯など、それぞれの気候風土と社会的歴史背景の中で独自の展開を見せてきた。

綴織は図柄・模様を織りだすために幾つかの技法があるが、その特徴は、経糸を緯糸でカバーしながら、下絵にしたがって異なる色の緯糸を織り込んでいくことで、自由で絵画的な表現が可能などところにある。現代にあっては、この綴織の特徴を生かした様々な造形的表現が生まれている。

許尚廉氏の博士課程のテーマは「綴織技法による台湾民話の芸術表現の可能性」である。台湾民話の詳細なリサーチと世界の綴織の特徴の研究によってテーマを生かすイメージ・キーワードとして「象徴と温もり」に着目し、自然への愛が生活に結びつくことによって生み出される芸術作品を目指している。

許氏の博士学位取得提出作品は、技法的な面で幾つかの工夫がなされている。中世のヨーロッパのタペストリーの制作には、20色から30色に染色した糸しか使わなかったが、その限られた色数で効果的な表現を可能にするために、混色技法や線影などの技法で模様を織だしている。混色技法は数色に分けた糸を数本引き揃えて、その組み合わせの変化によって複雑で微妙な色調を生み出すことができる。許氏は細番手のウール糸を染色して緯糸に用いているが、限られた色数を混色して色面を織だし、構成上効果的に作品の中に展開させている。

表現の面においては、「台湾民話」と「象徴と温もり」から得たインスピレーションとして、動物の「鹿」と「熊」を自然のイメージの中にミステリアスな雰囲気構成している。さらに、マリーローランサンの研究から得た女性らしいタッチによる色調を、混色技法によって巧みに消化し表現に生かしている。その結果、独自性のある完成度の高い秀作となっている。

今後の制作研究課題として、特定の民族・地域の民話を主題材とすると、そこに内在している精神性

や物語性は基本的に外すことができない。その制約を踏まえていかにして芸術表現として昇華していくか、高い時点で追及していくことが重要な研究課題となってくる。

さらなる台湾民話のフィールドワークも含めたリサーチ、世界の綴織の研究や絵画的平面表現の可能性を様々な視点から捉え、普遍性を有した高度な独自性のある制作研究となることを期待している。

(総合審査結果の要旨)

許尚廉氏は研究の発端が幼少期に母から受けた読み聞かせにあると言う。絵本を読んでもらう時の心の高揚感が、成長過程においても途切れることが無かったのであろう。許氏は台湾に生を受け、そこで成人となった。本研究で取り上げた民話は台湾の「原住民」のあいだで伝承されているもので、許氏を含め後に大陸から移住してきた民俗のものとはちがう。

大学では文学を専攻。「詩経」や「楚辞」、台湾現代詩を学び、最後に台湾原住民の民話に辿り着いた。それは幼い時に心の内を充たした絵本の世界が、原住民の質素で純朴な暮らしと共にある民話にリンクした結果かもしれない。

その後、言葉としての“音”よりも目に見える造形物に変換することで、より強さが増長され、伝え易いという着想に至った。それがタペストリー制作へとつながった。一方で平埔族の織りを行なう女性の写真に出会ったことも大きな要因として加担した。

文化人類学者のシュリアン・レヴィ・ブリュールの論や柳田国男らの民俗学の文献も多数読みこなし、学術的な論証比較も怠っていない。それらと比較をしながら台湾原住民の民話における原始神道、自然信仰の成り立ちまで言及した。第一章第3節で述べている象徴(symbol)は民話においても大きな役割があるとし、C.Gユングの見解を引用している。また、日常の中で生まれる織物やそこに施された紋様、あるいは入れ墨など民話とは切り離せない事象があり、検証のためのフィールドワークも重ねた。

織表現技法を研究するに当たり、神戸芸術工科大学修士課程に進学。各種技法の研究を進めながら、台湾少数民族の民話を二重織りの組織を用いて、タペストリーとして表現するまでに至った。本学博士課程での研究を、更に深めるためにヨーロッパにも赴き、日本や中国のものも含め比較検証した。根底には、単に民話の素朴さのみにではなく、今日の情報で溢れた時代において真の人間性回復にもあり、原住民の現地調査や聞き取りを通して、民話そのものや実際に使われていた民具、そこに施された紋様等を分析することで象徴化された民俗の精神を汲み取ることにつとめた。

本研究を通して原住民への理解が進み、精神文化としての民話を造形という可視化により創作できたことは大きく評価できる。表現においても従来数十色の色系使いに留まらず、交織することで複雑な色相をつくりあげることができた。多岐にわたる論考を進めながら、提出作品では綴織という絵画的情景表現にこだわったことにより、民話に潜む年月や意味合いの現出ができた。よって審査員で博士学位に適っていると判断した。